

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせいちしんかん きんせいがいが わんりゅうしがかん
平成知新館2F-4(近世絵画)に展示されている「縮柳詩画卷」について勉強してみよう。

旅立つ友への おくりもの

もうすぐ卒業シーズン。卒業式の日には、みなさんはどんなふう先生や友達とのお別れをするでしょうか。一緒に写真を撮ったり、みんなで寄せ書きをしたり、もしかしたら手紙やプレゼントを贈りあったりするかもしれませんね。離ればなれになっても、ともに学校生活を送った大切な人たちのことを、そして大切な人たちと過ごしたかけがえのない時間のことをいつでもすぐそばに感じられるように、私たちはたしかに手ざわりのある何かを手元に置いておきたいと思うのでしょうか。

そういう気持ちは、もちろん江戸時代の人たちにとっても変わることはありませんでした。いや、メールも電話もなく、飛行機も新幹線もない時代だからこそ、人との別れは現代の私たちよりもずっと深刻で切実なことだったといえるかもしれません。なにしろ、庶民の移動は徒歩が基本。江戸(現在の東京)と京都を結ぶ東海道の距離はだいたい500km弱で、おとなでも歩いて2週間はかかる道のりだったようです。しかも、一日に10里(約40km)も歩いて2週間です。40kmといえばフルマラソンとほとんど同じ距離ですから、それがどれほどたいへんなことか簡単に想像がつくでしょう。いまでは新幹線で2時間ちょっとの距離でも、昔の人たちにとっては決して気軽な旅行などではなかったのです。

そんな江戸時代を生き抜いた人たちは、人との出会いや別れをとりわけ大事にしていたように思えます。そのことをよく示す、「縮柳詩画卷」(図1)という巻物を見てみましょう。

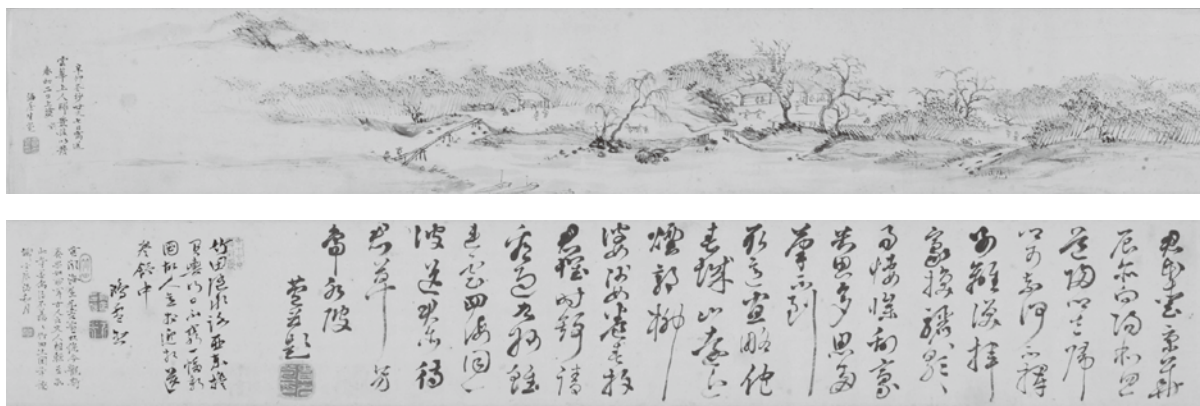


図1 貴名海屋筆「縮柳詩画卷」(部分)、個人蔵

の風景を描いた巻物ベストスリー) のひとつだと断言しています。

しばしのお別れ、とはいえ、それがいつ永遠のお別れになるかは誰にもわかりません。実際、雲華が京都で別れを惜しんだもうひとりの友人・頼山陽(1780～1832)は、この年の9月に急逝し、ふたたび会うことはありませんでした。

当然のことながら、いまやこの作品を生み出した海屋・雲華・竹田の3人は世を去り、作品を鑑賞している私たちにもいずれは旅立ちの日がやってきます。それでもこの作品があるかぎり、3人の友情と、彼らの営みが私たちの心に刻んだ何ものかは、けっして消えることはないでしょう。私はそこに、「文化」のかぎりない可能性と力を感じます。

(美術室 研究員 福士雄也)